

人びとが創るもうひとつのアジア

ハリナ

HALINA

no.41 2018年11月

【特集】

“甘い”果実の苦い真実
—フィリピンからの訴え

東北タイ・ムクダハン県

コムサン・チャイタウィーブ (愛称:デーン) さん (38歳)

Komsan Chaitawee

米、野菜、家畜など有畜複合循環型有機農業を実践しながら、様々なスタディツアーや各種研修を受入れ、ラーニングセンター的な役割も果たしている農園が東北タイ・ムクダハン県にある。その農主がデーンさんだ。元サトウキビ農園だったやせた赤土の土地をゼロから耕し、現在のような農業の形に至るまで、苦労と試行錯誤を繰り返してきたという。

若い頃には首都バンコクの工場に出稼ぎに出たが、お金も貯まらず、村に戻って行政区のリーダーをつとめていたお父さんの農村調査の手伝いをした。そこから日本国際ボランティアセンター (JVC) が当時バンコク郊外で行っていた自然農園プロジェクト (ノンジョク自然農園) の研修に出会い、NGO の自然農業普及員の経験を経て、元JVCタイ駐在スタッフの森本薫子さんと共に2006年に農園をスタートした。

自身の経験から、農民に伝えるには「生活の中で実践して見せていくことが一番効果的」と感じたデーンさんは、まずは自給のための作物づくり、その後は収入を生み出せるよう

様々な試みをしてきた。東北タイの人たちの好物であるタケノコやキノコは雨季にはどこでも入手できるが、スプリングラーを設置して、乾季に高値で販売をしたり、まとまった現金が手に入るように牛を飼育して、糞も堆肥として利用したりするようにしている。

今後目指すのは、この農園でできることを最大限に活かし、生産した農産物や加工品の販売による収入をもっと増やしていくこと。一般的に東北タイの農民は、農業による成果を収入で計る。そのため、循環型農業で自給できているとしても、国内外から多くの研修を受け入れる学びの場となっているとしても、数字 (収入) で示せない限り、周辺の農民は本気で関心を持ってくれない。安定した収入につなげて初めて認められる。「これからの時代は、農業だけでは難しく、大工仕事、獣医学、経営学、言語など、農民自身が様々な知識と技術を得ることが大切だ」と力強く話してくれた。■

【写真・文】

寺田 俊／てらだ・しゅん
APLA事務局



水田の様子。



仔牛生産もしている。立派な牛舎で牛も快適そう。



僕は左手で包丁を握る。それを支える右手はいつも余計な事ばかりを考えている。筆は右手なので、その遊び心で『居酒屋おやじがタイで平和を考える』(コモنز) を出版した。

居酒屋を営んで10年以上の月日が経つが、これまで長くタイを中心とした国際交流に関わり、20数年前には、日本ネグロス・キャンペーン委員会(JCNC/現APLA)の関連団体「むらとまちのオルタ計画(RUA)」で働いたことで、フィリピンの人びとにも出会えた。居酒屋という居を構えることによって、その仲間たちに会いに行く機会が少なくなること覚悟しての開

RELAY ESSAY ぽこぽこ poco-poco 41

居酒屋おやじがタイで平和を考える

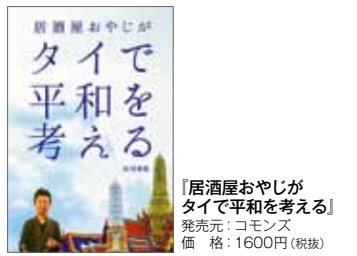
松尾康範／まつお・やすのり
居酒屋 百年の杜店主、アジア農民交流センター事務局長



タイに出かけた。その旅の道中での出来事を交えながら、タイの農村の様子、これまでタイで取り組んできた活動、仲間たちの日本の地域でのユニークな取り組みやお酒や食にまつわる物語を綴った。そして最後は、「自分自身が安心できる食やお酒を選ぶという、ある意味で自分本位な行為が、究極の国際協力で、平和構築なのではないか」とまとめた。

国後、RUAやJCNC、AFECを通じて出会ったお百姓さんたちの交流活動、あのころに僕のポコポコは生まれ、この本の上梓にもつながった。

旅にはATJやAPLA関係者も参加され、その諸先輩から学んだ経験も綴ることが出来た。この場を借りて深くお礼申し上げます。■



居酒屋 百年の杜
〈住 所〉神奈川県横須賀市久里浜1-5-15
〈電話番号〉046-834-7372

業だったが、やはりそのことが今の僕にとっての贅沢な苦痛になっている。

2017年11月に僕が事務局を務めるアジア農民交流センター(AFEC)の仲間たちと久々

Contents	
02	【ぽこぽこ 41】 居酒屋おやじがタイで平和を考える ◎松尾康範
03	【百姓 オブ ザ ワールド 04】 東北タイ・ムクダハン県 コムサン・チャイタウィーブ (愛称:デーン) さん 【写真・文】 寺田 俊
04	【特集】 “甘い”果実の苦い真実 —フィリピンからの訴え バナナプランテーションと農業使用の実態 —労働者と周辺住民の健康は？ ◎チンキー・ベリーニョゴリエ バナナ生産者を苦しめる 大手企業との栽培契約 ◎アーヴィン・サガリノ
09	【COLUMN】 【百姓の100章 ⑩】 小規模・家族農家とSDGs (持続可能な開発目標) —誰もが当事者「地球を救う機会を持つ最後の世代」として ◎斎藤博嗣&裕子 【続 Have you ever seen the cinema ⑩】 『ザ・カップ 夢のアンテナ』◎重政栄一郎
10	【Topics】 01- ラオスのダム決壊事故の教訓は？ ◎木口由香 02- ドキュメンタリー映画『ほたるの川のまもりびと』に込められた私たちの思い ◎石丸穂澄
12	【PtoP “最前線”】 バランゴンバナナ・ ミンダナオ島の生産地のご紹介 ◎赤松結希 【スタッフが語る出張こぼれ話】 生産者たちのその後に驚き！◎中村智一
14	【Voice from APLA partners】 From Fukushima ソーラーシェアリングで売電が始まりました！ From Northern Luzon, Philippines 公設市場にBMWプラントが設置されました。
15	事務局だより
16	【KITCHEN APLA】 海老のココナッツカレー◎鈴木裕

表紙のことば

日本から遠く離れたヒマラヤの麓に暮らすプータンの人びと。不思議なことにその顔つきは、私たち日本人に酷似している。プータンの人びとが日本にやって来て、満員電車の中に混じっていたとしても、おそらく誰も気づく人はいない。

プータンでは伝統的な民族服装を着る人が多い。写真は「キラ」と呼ばれる女性用の衣装に使われる木綿の布である。巻きスカートのように「キラ」を着こなす姿は和服のシルエットに近い。やはり和服に似た男性用の民族衣装は「ゴ」と呼ばれる。こちらは日本の呉(ゴ)服と、音まで共通している。

こんなに共通点と親近感を感じるプータンではあるが、プータンの家庭料理として有名なエマダツィを一口食べれば、そんな淡い感傷は見事に吹き飛んでしまう。唐辛子とチーズを煮込んだ世界一の辛さが口全体を焼くように襲い、翌日は文化の違いを胃と腸で思い知らされることになる。(山田和生)

甘い果実の苦い真実

— フィリピンからの訴え —

2018年夏、エシカルバナナ・キャンペーンの立ち上げに合わせ、フィリピン・ミンダナオ島からゲストを招き、バナナプランテーションの現状を聞く報告会を開催しました。今現在現場で起きている生の声をお聞きください。

フィリピンからバランゴンバナナが初めて日本に届けられたのが1989年。バランゴンバナナの民衆交易は、80年代にネグロス島で起こった砂糖危機と飢餓をきっかけにして、人びとの自立を支援する取り組みのひとつとして始まったという事は、『ハリーナ』の読者の皆さんの多くがご存知のことだと思えます。当時は、鶴見良行氏の著作『バナナと日本人』（1982年、岩波新書）によって、フィリピンのバナナプランテーションにおける農薬散布や労働問題などが明らかにになり、オルタナティブ（代替的）なバナナを求める声が強くなっていった時代でもありました。

それから30年。現地パートナーや日本国内の消費者の皆さんと共に試行錯誤を繰り返しながら、バランゴンバナナの産地は、ネグロス島以外に、パナイ島、ボ



「空中散布に反対する市民の会」による空中散布反対のデモの様子。

付けています。

しかしながら、そのバランゴンバナナが市場に占める割合はわずか約0・16%に過ぎないのもまた事実です。小さな割合でも「オルタナティブなバナナを輸入・販売する」事業を続けてきたことの重要性を認識する一方で、そのことで満足して

いては、『バナナと日本人』が私たちに投げかけた問題——多国籍企業による支配の構造や日本とフィリピンの歪んだ関係——に目をつむることになってしまふ、という想いは常にありました。特に、2002年以降は、ミンダナオ島のバランゴンバナナ生産者との出会いによって彼らが生活する地域の問題として、プランテーションがもたらす影響が隣り合わせであることも知ることになります。研究者の方々の力を借りて、2014年にオルター・トレード・ジャパン（ATJ）と協同で取り組んだミンダナオ島のバランゴン産地の調査のなかで見えてきたバナナプランテーションの実態は、日頃からバランゴンバナナを購入し食べている方たちに限らず、日本の消費社会に広く問いかけるべき問題だと感じてきました（現地調査の報告については『ハリーナ25号』の特集を参照のこと）。

エシカルバナナ・キャンペーンの立ち上げ

「多国籍企業は、巨大なプランテーション

や健康被害の問題、そして大企業とバナナ生産者との不公平な契約の問題です。それらの問題について、バナナ生産者に寄り添った活動を続けてきている二人からの訴えをお届けします。（編集部まとめ）

バナナプランテーションと農薬使用の実態

— 労働者と周辺住民の健康は？ —

チンキー・ペリーニョ・ゴリエ / Chinkie T. Pelino-Golie
Inter Development Interventions Inc. (IDIS) 事務局長

これから話す話の前に念頭に入れておいていただきたいのは、現在フィリピン全体で生産されるバナナの約30%が日本向けに輸出され、その大半を占めるキャベンディッシュ

ユという種類のバナナは、地元ミンダナオの人たちは食べないバナナであるという事です。

農薬の空中散布との闘い

私たちIDISは2005年に、地域で活動する仲間たちが「これ以上農薬の空中散布に耐えられない」と事務所に助けを求めにきたことから活動を始めました。それ以降バナナプランテーションにおける農薬の空中散布に関わる活動を続けてきました。ダグス・マガウエイさんが2006年に撮影した写真を象徴的な写真として用い、この写真を持って地元議員にかけあったり、裁判所に提訴し、空中散布をこれ以上放置することはできないと訴えてきました。この写真には、

早朝に子どもたちが学校へ通学しているときに空中散布をしている飛行機が写っています。このほか、飛行機の下にはプランテーションのすぐ隣や畑の中に人びとが暮らす家、日々活用する道路があります。

空中散布をおこなった場合には、地上から農薬を散布した場合に比べて、環境や人の健康への影響が甚大です。かつてはヘリコプターが使われることが多かったのですが、最近では小型の飛行機が使われています。空中散布をする企業はバナナの病虫害をターゲットに散布しているものであり、GPSをつけている



ダグス・マグウェイさんの写真。

から問題ないと言います。しかし、GPSは風をコントロールできません。風向きによっては、関係ないところに農薬が流れてしまうこともあるわけです。農薬は人びとの健康や生態系、生物多様性に大きな影響を及ぼします。人間や科学技術で風をコントロールすることができない以上、農薬の飛散を防ぐことはできないので、空中散布を禁止しなくてはいいのです。

私たちが法廷に提出した被害者の方々の写真の中には、子どもも女性もいます。ある方は、GPSがない時代に空中散布の範囲を示すための旗を農園の端で持つという仕事に従事していました。つ

ヨンを開発し、農薬を空中散布して安くバナナを生産している。日本の消費者がそうしたdirty toxic bananas（汚れた毒バナナ）を購入することが、ミンダナオの大地を汚染し、地元住民や労働者の健康を害することにつながっている事実を知ってもらいたい」、これは前述のハリーナ25号でもご紹介したミンダナオ島コタバト州マキララ町で農民支援を続けてきたNGOの代表マリアヘレニタ・ガメラさんの言葉です。「汚れた毒バナナ」という非常に強い言葉にショックを受ける方も少なくないでしょう。けれども、現地からの訴えをないことにはできません。まずは現地の実態を知り、広く日本社会に知らせなくてはいけない、そして多国籍企業の行為を変えるためのムーブメントを作っていく必要がある、そのためには何が必要か……そうした議論を繰り返し、想いを同じくするアジア太平洋資料センター（PARC）、(株)オルター・トレード・ジャパン（ATJ）と一緒に2018年夏に立ち上げたのが「エシカルバナナ・キャンペーン」です。

最終的には、日本に輸入されるすべてのバナナが「エシカル（倫理的）なバナナ」——持続可能な農法で作られた地球にやさしいバナナ、生産から流通・小売りまでサプライチェーン上のすべての労働者の人権が守られているバナナ、食べる人も作る人も、ほかの誰かの人生を踏みつぶすことなく笑顔を広げられるバナナ——になることを目指しています。

まり空中散布の間ずっと旗を持って立っているという仕事です。それにより農薬の飛散を受け続け、ある日、目が見えなくなってしまうのです。その時に会社 に掛け合ったものの、結局仕事を失ってしまい、今もずっと目が見えない状態です。私たちはこういった方々と共に闘い続けてきました。そして2007年にダバオ市の条例で空中散布が一旦禁止されるようになって喜んだのもつかの間、ダバオ市が業界団体から提訴され、条例は結局2016年に取り消されてしまいました。「空中散布に反対する市民の会」の中でも、すでに亡くなってしまった方もいます。

闘い続けている人たちの想いに対する正義が今現在も果たされていないので、あきらめずに闘い続けなくてはなりません。一方で、小さな成果もありました。空中散布にさらされているコミュニティの人たちが団結して声を上げ続けたことによつて、ダバオ周辺では空中散布を止めるという判断をした会社が出たことです。現在までダバオ周辺で空中散布をしている企業はスミフル（注）だけになりました。空



空中散布の風景（南コタバト州ディポリ町）。

中散布を止めた会社は、もちろん農業自体は使い続けていますが、地上からブームスプレーで散布したり、地面で人が散布します。農業自体の影響がなくなっているわけではないのですが、空中散布に関しては、人びとが団結して声をあげることで一部止めさせることに成功したと言えるでしょう。そして、棄却されてしまったダバオ市の条例についても、空中散布の危険性について問うものではなく、

条例の制定のされ方という技術的な問題が理由だったので、私たちはダバオ市と周辺の地方自治体も含めて、その問題を解消した上で改めて別の条例によつて空中散布の禁止を求める活動を続けています。

企業主導の プランテーションが 引き起こす問題

大規模なプランテーションは空中散布以外にも環境へ影響を及ぼしています。例えば土地の浸食です。川の両側に木が生えている場合は、土砂が川に流れ込むことを防いでくれますが、バナナプランテーションとして土地が開拓されると土の浸食を止めることができません。その結果、土砂が流れ込み、堆積して川の真ん中に中洲のような島

ができて、元々あった川の姿は見えなくなります。こうしたことが上流で起きると、川全体に影響を及ぼします。つまり、バナナプランテーションの存在が人びとの生活を支える水や環境保全に大きな影響を与えています。

こうした個別の問題一つひとつに留まらず、企業主導のプランテーション農業のあり方そのものを問うべき時がきていると思います。水、空氣の汚染、生物多様性の破壊といった環境問題、健康の問題、さらには食料保障の問題など、挙げればきりがありません。ミンダナオはフィリピンの中の一大耕作地でしたが、輸出作物を作るプランテーションに転換していったために、地元の人たちのための食糧の生産場所が減ってきています。その結果、ミンダナオでは食べものが十分に足りておらず、飢餓の問題まで発生しているのです。

ミンダナオからの メッセージ

私は、今日ここでお話できることがとても幸運なことだと思っています。私たちは、ミンダナオから輸出されていくバナナを消費する世界の人たち、特に日本の人たちに直接想いを伝えたいと思つて過ごしてきました。日本の皆さんはこの状況に対してできることがたくさんあります。私は決して皆さんに「バナナを食べないでください」と言いたいわけ



コンボラスバレー州を横切るアグサン川。川の両側にはバナナが植わっている。

ではなく、皆さんが好きなバナナを食べる、あるいは買う時に、フィリピンの私たちのこと、バナナ農園で働く人たち、農業の被害を受けている人たちのことを思つてほしいのです。そしてバナナをつくる多国籍企業に圧力をかける、その役割を一緒に担つていってほしいのです。正直なところ、どのバナナがエシカル（倫理的）に作られたものか、ということが分かりえないのが日本の現状だと思います。しかしながらそうした中でもエシカルなバナナを求める声が強まることで、企業も安全で環境に配慮したバナナを作りはじめていくことが実現できればと思っています。そういった行動を日本で起こしてもらえれば、ミンダナオの私たちの社会的・環境的な正義を追及していく活動への力になります。■

バナナ生産者を苦しめる 大手企業との栽培契約

アーヴィン・サガリノ／Irvin Z. Sagarino
The Initiatives for Dialogue and Empowerment through Alternative Legal Services (IDEALS) 法務相談員・弁護士

今 私は、フィリピンの農地改革制度の受益者、なかでもコンポステラ・バレー州でバナナを生産している方々の声を代弁して皆さんにお話します。プレゼンの内容の1つは、バナナ生産者が実際に置かれている経済的状況、そして2つ目はバナナ生産者が結ばされている企業との契約内容に関する法的な論点です。

コンポステラ・バレー州では、広大な土地がバナナのプランテーションになっています。約2000ヘクタールもの広さのプランテーションでは、小さな土地を所有している生産者たちがスミフルとそれぞれ契約しています。この生産者たちの背景を少し説明すると、彼らはスミフルとバナナ生産契約をする前に、DFC（注）という会社で働く労働者でした。しかし、フィリピンで包括的農地改革計画（CARP）という法律が定められ、広大な土地を切り分けて、元々農園労働者だった人が土地を所有できるようになりました。

フィリピン南部のバナナ生産者の経済状況は厳しいものです。コンポステラ・



コンポステラ・バレー州のバナナ生産者とバナナ畑。

バレー州のバナナ生産者の多くは、20、30、40年と長年企業のために働き続けてきたにも関わらず、それでもなお、いまだ貧困の中にいるという状態です。バナナ生産者が得られる収入は生活をしていくのに十分ではありません。バナナ生産者が企業から得られるのは、バナナが13・

無効な契約に 縛り続けられる 生産者たち

契約の中身を見ると、バナナ生産者が貧困状態にあり続けるというのが何ら不思議ではないことがわかります。生産者たちは契約の内容を十分に知ることなく契約をさせられています。バナナ企業と生

産者たちが取り交わす契約の種類は今も昔も「独占的生産販売合意」という1種類ののみで、この契約が法的に有効であるかという点もまったく無効です。なぜなら、企業側が一方的に作成した契約であり、交渉段階においてバナナ生産者たちが一切参加できないものだからです。フィリピンの民法においては、契約が有効であるためには、3つの条件が必要とされています。そのうちの1つが同意です。この同意というのは、自由意思にもとづき、十分な情報を持ったうえで同意でなくてはならないとされています。バナナ生産者たちは企業が一方的に作った契約書に契約させられているので、これは自由意思に基づく同意のうえで作られた契約書ではありません。さらに、契約書は英語だけで書かれています。ほとんどのバナナ生産者は初等教育しか受けていないので、英語の契約書を十分に理解することはできません。しかし、バナナ生産者たちに十分に説明しようという企業側の努力は一切ないのです。さらに企業は、バナナ生産者たちが契約を取り交わすために微々たる額の契約金買取の一部先払いも含む）を支払いました。つまり、契約をして署名すればお金がもらえるといった動機づけを用意することによって貧しい生産者に契約を促しているのです。そしてもう1点、この契約が無効である理由は、「独占的生産販売契約」が所定の政府機関による検証・承認を受けて

ひろつぐとゆうこの

百姓の100章

A Farmer have One Hundred Stories.



斎藤博嗣&裕子／さいとう・ひろつぐ&ゆうこ
—反百姓「じねん道」—



SDGs最後の項目17は「目標のために協力すること」を設定している。地球とパートナーシップを直接結んでいる百姓のエンパワーメントを土台として、全員参加で「地」のプラットフォームを手作りし、SDGsの課題を解決しよう！

※「反百姓」「じねん道」の自家採種のタネは、APLA SHOPに購入できます。

第10章 小規模・家族農家とSDGs(持続可能な開発目標)
—— 誰もが当事者「地球を救う機会を持つ最後の世代」として

ノド元過ぎれば「猛暑」忘れる。最高気温40℃も珍しくなく、全国各地で気温・雨量・風速「観測史上最大」の連続だった今夏。西日本集中豪雨に伴う土砂崩れや河川氾濫、東から西に異例のコースを横断した逆風台風、暴風と高潮発生による関西国際空港浸水、そして北海道地震と水・食料・電気不足…、災害の続発は今も「記憶に新しい？」だろうか。急務なのは、2020年夏の東京オリンピックに向けての暑さ対策ではなく、日本の国益という近視眼的な観点を超え、地球全体を俯瞰した命を守ることを何よりも優先させるユニバーサル社会の形成である。2015年に国連の全加盟国によって採択された「SDGs(Sustainable Development Goals)アジェンダ2030」では、世界を変革する行動の呼

びかけとして「我々は、地球を救う機会を持つ最後の世代になるかもしれない」と宣言文に明記されている。先行世代は災害時代に向け、若い世代にツケを回さず、自らの世代の責任を果たすことができるだろうか。SDGsの様々な目標やターゲットは、互いに切り離せない世界的優先事項であり、地球温暖化による異常気象など農は深く関連し、持続可能な社会の担い手として、小規模・家族農家は中心的役割を果たすことが期待されている。

小さな百姓「じねん道」は、世界中で起きている異常気象と巨大災害を、これまでの社会と発展のあり方とめ、経済最優先の生き方を転換し、自然の均衡を重んじた農を中心とする共生社会作りと、一人ひとりが農的な暮らしに関わる生活設計こそが、温暖化を防止する持続可能なグラウンドデザインであると考えている。

生きる緊張感を生活の中に持つ「自給自足」の要素は災害対策に直結する。自らをオーガナイズし、他人事ではなく当事者として生きる「地球市民皆農」は、SDGsの掲げる「誰も置き去りにしない(No one will be left behind)」を実現する道だ。

Have you ever seen the Cinema? あ映画を見たかい? 10

『ザ・カップ 夢のアンテナ』【原題】Phôrpa (1999年、ブータン／オーストラリア)

【監督】ケンツェ・ノルブ 【出演】ウゲン・トッブゲン、ジャムヤン・ロドゥ



『ザ・カップ 夢のアンテナ』
発売元：キングレコード
価 格：中古品のみ販売

監督も出演者も実際の僧侶(かなりの高僧も出演、撮影地も本物の僧院、それでコメディという異色作だ。実はウゲンと同じく、筆者も大のサッカー好き。川崎フロンターレと日本代表の試合には、毎度熱くなる。国家代表チームへの応援をナショナルリズムの観点から批判する人がいる。古今東西、時の為政者がスポーツを国威発揚や国民統合(一内)に向かつては管理・統制、外に向かつては排除・時に排撃に利用してきた歴史は知っているが、こればかりはしょうがない。理屈ではない。

無邪気に応援できる代表チームを持つことは当たり前のことではなく、存外、幸せなことなのかもしれない。【追記】2014年より民族的マイノリティや未承認国家などのチームが集つたサッカーの世界大会が開催されている。そこにはチベット代表チームの名前もある。日本からも在日コリアンチームが出場している。琉球チームも出場を目指している。

※ Counter Aワールドフットボールカップ。

重政栄一郎／しげまさ・えいいちろう
エディトリアル・デザイナー

御釈迦様だってサッカー好きに違いない…

1998年インド、ヒマラヤ山麓にあるチベット仏教の僧院が舞台。主役は、修行僧の少年ウゲン。仏教修行の日々を送るウゲンだが、近頃そわそわ気もそぞろ、修行にも身が入らない。理由は開催中のサッカーW杯のため。仲間内で交わされる会話はW杯のことばかり。サッカーが大好きなウゲンはテレビの生中継を観るため、夜中にこっそり僧院を抜け出すが……。

ただ批判する御仁も、単なるアンチナショナリストなだけだったりする。ナショナルリズムをひっくり返しただけで、本質はなんら変わらない。W杯でスーパースター達が魅せる熱い戦いや美技の数々に興奮するウゲンだが、そこには彼が心から応援するチームはない。彼らの国の代表チームが出場していないからではない。彼らにはそもそも国家代表チームそのものが無いのである。彼らは亡命チベット人。国なき民だ。

仏教の慈愛の精神に満ちた心優しく、爽やかで、楽しい青春映画であるが、随所に現実の政治状況が垣間見られ、彼らの苦境がにじみ出る。さて、中国チベット自治区に生きるチベット人は、はたして中華人民共和国の国家代表チームに心を寄せるのであるか？ ミンダナオのムスリムは？ ロヒンギャは……？

めてほしいのです。司法手続きでは時間がかかったとしても、世論によって企業が契約を改めるということは可能はずです。そしてDEALSではそれを求めるための署名をオンラインのChange.orgで集めています。皆さんにもご参加いただき、バナナ企業が公正な契約を生産者たちと結んでいくように、協力をお願いします。

日本の消費者の皆さんへ

このように法的にも無効と言えるような契約内容なのに、なぜバナナ生産者たちは司法に訴えないのかと疑問に思う方もいるかもしれません。実際に司法に訴えて、この契約が無効であることを証明したいと思っているバナナ生産者もいます。しかしフィリピンの司法制度では、裁判に持ち込んだとしても非常に長い時間がかかるので、すぐにバナナ生産者の救済につながりません。無効であるという判決が出るまでは、契約に縛られ続けるのです。そして契約の不履行に対しては、経済的制裁も待っています。そのため多くのバナナ生産者が公正な契約に従い続けなくてはならない状況にあり、そのことがバナナ生産者たちを貧困に縛りつけ続けているのです。

ただし、バナナ生産者が契約の破棄を望んでいるわけではなく、ということをお分りいただければいいと思います。企業に公正な契約を結んでほしい、ということをおっしゃっているのです。皆さんにも協力できることがあります。バナナ企業に対して、バナナ生産者と公正な契約を結ぶことを求

Help revoke unfair contracts between Filipino Banana Farmers and Big Businesses!

Change.org
Help revoke unfair contracts between Filipino Banana Farmers and Big Businesses!
ミンダナオのバナナ生産者を支えよう!
不公平なアグリビジネスとの契約を解除すべき!

エシカルバナナ・キャンペーンに賛同してください!
<https://www.e-banana.info>

エシカルバナナ 検索

【注1】スワフル・フィリピン・コーポレーション。日系多国籍企業(住友系列)。現地でバナナやバナナチップ、パイナップルの生産・管理・販売を担っている輸出会社。
【注2】トラックに積んだタンクの農業を高圧ホースを使って散布する。
【注3】1986年、ヒルパワール後に就任した「コソン・ファキ」大統領が公約のひとつとして掲げたひとつが農地改革。88年に包括的農地改革法(CARL)が公布され、地主が所有する土地も農地改革の対象となり、農業労働者も受益者として土地を所有できるようになった。受益者たちは30年かけて土地を返済する。
【注4】ダバオ・フルーツ・コーポレーション。住友商事と全量買収契約があり、生産技術管理・輸出を担っている。
【注5】個人・民間・投資家と高付加価値作物を生産する農地改革受益者の間で結ばれる業務提携のこと。農地改革がなされた土地の生産性と収益性を上げるため、民間企業が関わり農地改革受益者を中小規模の農業事業家にする。フィリピンの農業セクターに競争力を持たせるものとする。そのための土地はすべての商業的農地に適用され、バナナ、パイナップル、ゴムの対象地となっている。このことにより、アグリビジネスが農地改革の相対の中に入ったという見方もある。

ラオスのダム決壊事故の教訓は？

木口由香／きぐち・ゆか

メコン・ウォッチ事務局長

それは水に見えなかった。まるで垂直な崖のような有様で村に届き、家や木をなぎ倒して行つた。家も、家畜も米蔵も、バイクも何もかも流された。子ども15名も亡くなった。SNSに流れた映像の中で、ある村の村長は事故の様子をこう語る。

セピアン・セナムノイダム決壊事故

2018年7月23日、ラオス南部で建設中のセピアン・セナムノイ水力発電ダム事業で山あいを塞ぐために建設された補助的なダムが決壊、川に膨大な量の水が溢れ出した。アッタプー県サナムイ郡の川沿いの13村が被災し、8月末で39人の死亡が確認され、4千人以上が家を失い避難所に収容されている。ラオス政府は行方不明者を60人程度とするものの、実際にはもっと多いのではという報道が複数出ている。水はカンボジアにまで達し、被害は国境を超えた。両国ともに住民のほとんどは少数民族である。

ダムは、韓国とタイの企業4社による合弁企業のもので、韓国のSK建設社が工事を担当する。SK建設は事故原因を



被害が起きたセーピアン川の10年前の風景。子どもたちが渡し船を操っていた。(撮影：筆者)

大雨としているが、工事や設計のミスでは、という報道が数多く出ている。韓国の国会議員が調査に関心を持っているといい、今後原因と責任者が特定され、被害者がきちんと救済されることが強く望まれる。

「アセアンのバッテリー」を目指すラオス

内陸国ラオスは水力発電を中心とする経済政策を掲げる。最近、水力発電分野は日本や欧米よりも中国企業の参画が顕

著だが、日本は過去、これに深く関わってきた。同国で初めての大型水力発電ダムは日本政府が1960年代に支援したもので、日本のコンサルタントは複数のダム計画を立案していた。

インドシナ戦争や東西冷戦で中断していた開発が動ききっかけとなったのは、2010年に運転を開始したナムトゥン2水力発電ダムだ。日本が出資比率2位と1位の世界銀行やアジア開発銀行(ADB)が資金調達や技術移転という形で開発を支援した。この際、世界各地のNGOと研究者が環境社会影響の大きさを指摘し長期にわたる論戦が繰り広げられた。その後、複数のダム建設が始まったが、未だに後発開発途上国のラオスで大規模開発が出来るのは、民間企業のBOT方式の投資や、国際援助があるからだ。ラオスの中でのこのような仕組み作りを支えてきたのは世銀やADBだ。

もちろん彼らも、環境社会配慮分野の人材育成は行っている。だが、それは加速する開発に追いついていたようには見えなかった。

一党独裁のラオスで人びとは自由に事業を検証・批判することはできず、アセメントに住民参加が謳われても、実態が伴わないことが少なくない。ラオスの腐敗認識指数は180カ国中135位と低く、企業活動に公的な監督が行き届いているとも考えにくい。今回の事故では、ラオス政府も汚職捜査を行うと公表した。

ダム開発を支えるのは世界からの資金

事故を起こしたダムは実は資金面で日本とつながっている。合弁会社に協調融資するタイの4銀行のうち、クルンシィ・アユタヤ銀行は三菱UFJフィナンシャル・グループの傘下にある。また、年金積立管理運用独立行政法人(GPIF)は、タイ国営クルンタイ銀行の株を約14億8千万円保有、事業に関わる韓国輸出銀行の債権も約62億7千万円保有している(ともに2017年度末の時価総額)。日本だけでなく、欧米の年金基金からの投資もあり、結局世界中の人が少しずつ、このような企業活動を支える仕組みに巻き込まれている。だが、それぞれの関与は小さく、責任の所在は見えにくい。

暮らしを脅かす企業活動に対し、国連の「ビジネスと人権」の指導原則など、枠組みはすでにある。日本でも、サプライチェーンにおける人権・環境配慮に企業の関心が高まっている。一方、今回の事件では責任を取るべき参画企業と投資先の動きは鈍い。人びとを守る原則が実際に力を持つためには、資金を出す側の市民からの更なる働きかけが必要だということだが、今回の事故の苦い教訓なのではないかと考えている。

(注1) 外国企業が工場などを建設し一定期間運営・管理・投資を回収した後相手国に施設や設備を譲渡する開発方式。
(注2) NGOトランスパレンシー・インターナショナルが発表する公務員と政治家の腐敗の認識を国際比較した指標。

ドキュメンタリー映画

『ほたるの川のまもりびと』に込められた私たちの思い

石丸穂澄／いしまる・ほすみ

長崎県石木ダム水没予定地住民、イラストレーター

長崎県東彼杵郡川棚町に約半世紀前に計画された県営石木ダム建設問題。私は、石木ダム水没予定地川棚地区に生まれ育ち、現在もこの小さな集落で細々と暮らしています。この場所には、半世紀近くダム建設に抗いながらも、自然に寄り添った里山暮らしを満喫する個性豊かな13世帯約60人が大きな一つの家族のように暮らしています。

私たちはなぜ、ここに住み続けるのか

そもそもの石木ダム建設の理由は、佐世保市の針尾工業団地計画まで遡ります。工業団地計画は失敗に終わり、現在、その場所にはハウステンボスができています。コロナと変わる利水目的の理由に住民たちは到底納得できるはずありません。また、治水の面でも川棚川全体わずか11%の流域面積しかない石木川にダムを作って下流の洪水対策に役立つのか疑問視されています。地元の人には言います、「もし、佐世保市民が本当に水に困っているのなら仕方がないと諦めます。



『ほたるの川のまもりびと』オフィシャルサイト

<https://hotaruriver.net/>

自主上映についてのお問い合わせは、
配給の株式会社ぶんぶんフィルムズまで。

tel: 03-6379-3938

fax: 03-6379-3928

E-mail: info@hotaruriver.net

しかし、ダムが必要であるという科学的根拠は一つありません。こんなデータで役に立たないダムのために先祖代々引き継がれてきた私たちの生活を犠牲にするなんて到底納得できません。

映画に込められたメッセージ

ダムに反対している地元の人たちのイメージといえば、「赤いハチマキにサングラスにマスクといった格好でシュプレヒコールをあげる過激な集団」であり、真実が全く伝わっていないと私は日々感

じていました。そのため、私は絵を描くことで水没予定地の情報発信を行うようになりました。

映画『ほたるの川のまもりびと』では、イラストを描き情報発信を続ける私の活動のほか、全国大会を目指してソフトボールの練習に励む川原さん親子、長男がダムを作るかもしれない建設会社へ就職を決めた松本家のお話、ママシとりの名人・岩本さんの自給自足に近い生活、それに毎年恒例となっている5月の最終土曜日に開催される「こうばるほたる祭り」の様子、子どもたちの川遊びや魚釣りなど、私たちにとっては当たり前の日常ばかりですが、都市部の皆さんから見ると羨ましいほどの里山生活が淡々と描かれています。

また、ダム建設による付替道路工事現場での抗議行動の様子、1982年に機動隊を動員して行われた強制測量の歴史、専門家による石木ダムの必要性の有

無、ダムによって破壊された地域のコミュニティにも触れられており、ダム水没予定地が抱えてきた特殊な事情にも触れられています。この映画には、「ダム計画があったが故に奇跡的に手つかずのまま残された自然とそこで暮らすこうばるの人びとの長期に及ぶダム闘争とその苦悩」という一筋縄ではくれない、半世紀の間、社会にうまく表出されてこなかった石木ダム水没予定地の「ありのまま」がぎゅっと詰まっています。

私たちの映画に関わってほしい

『ほたるの川のまもりびと』は、2018年7月に東京ユロスペースで一般公開、8月には地元の長崎セントラル劇場でも一般公開が終了しました。現在も各地方の劇場にて一般公開が予定されていますが、9月より自主上映会の申し込みを開始しています。ぜひ一度私たちの映画をご覧いただき、さらに各地で自主上映の輪を広げていただきたいと思います。支援をよろしく願います。

石木ダム問題とは

長崎県と佐世保市が東彼杵郡川棚町を流れる二級河川の川棚川支流、石木川に利水(佐世保市の水の確保)と治水(川棚川の洪水防止)を目的とした多目的ダムとして建設を計画。1962年に予備調査を実施。2010年より付替道路工事に着手。現在、国交省によって住民が暮らす家屋や農地などの土地の強制収用を可能とする事業認定がなされている。

石木ダム問題についてもっと知りたい方は、「石木川まもり隊」のウェブサイトをどうぞ。
ishikigawa.jp

バランゴンバナナ・ ミンダナオ島の生産地のご紹介

赤松結希／あかまつ・ゆき
（朝オルター・トレード・ジャパン 商品一課）

1 989年にネグロス島から始まったバランゴンバナナの民衆交易ですが、2002年以降はミンダナオ島の生産者からもバナナが届いており、現在は産地が4カ所あります。南コタバト州のツピ町とレイクセブ町、コタバト州のマキララ町、そして島北部に位置する北ミランダナオです。これら地域からの出荷量は、バランゴンバナナの輸出量全体のうち約4割を占めています。

そもそもミンダナオ島は、フィリピン政府が「約束の土地」として、ルソン島やフィリピン中部のビサヤ諸島からの移住政策を推し進めた島で、キリスト教開拓民、ムスリム及びブルマドと呼ばれる非ムスリムの先住民民族で構成され、多様な人びとが住んでいます。また、化学合成農薬を多用して単一栽培するプランテーションが広がる農業の島です。そのような島で、農業を使わない持続可能な農業をしたいと考える生産者たちにとって、バランゴンバナナは安定した出荷先として大きな意味を持っています。

のスタッフは現場で生産者に指導・サポートしながら、バランゴンバナナ栽培に取り組んでいます。

マキララ

フィリピンで一番高い山であるアポ山の中腹に位置するコタバト州マキララ町では、2013年からバランゴンバナナが出荷されています。バランゴンバナナの圃場からは距離がありますが、多国籍企業が、主に日本向けに輸出している高地栽培バナナのプランテーションが拡大している地域です。

バランゴンバナナの出荷責任団体であるドンボスコ財団は、以前から多国籍企業のパナプランテーションの問題（空中散布、労働者の人権問題など）に取り組んでいるNGOであり、コタバト州が空中散布を禁止する条例を設けることに貢献しました。



マキララの圃場の様子。

今回は、3つの産地を紹介します。

ツピ

ツピ町は、2002年からバランゴンバナナを出荷している産地で、一部山奥に畑がある生産者もいますが、多くの人が区画された平地で集約的にバランゴンバナナを栽培しています。

生産者たちの多くはバナナとココナツを混植し、コプラ（完熟させたココナツの実を乾燥させたもの。油の原料となる）を作ることでも定期的な現金収入



ココナツとバナナが混植されている（ツピの圃場）。

を得ています。バランゴンバナナは収入全体のうち約3割を占め、主要な現金収入源のひとつとなっています。

ツピ町の生産者の中には、キリスト教徒、ムスリム、先住民民族がいます。文化的背景や土地所有概念の相違から、ムスリムを含む先住民民族とキリスト教開拓民の間で紛争が発生し、ツピ町も昔は対立が激しかった地域のひとつでした。しかし、今では共にバランゴンバナナの民衆交易に取り組んでおり、バナナを箱詰するパッキングセンターでも一緒に働いています。

ツピ町の生産者で、キリスト教徒であるマルロ・ビリアロンさんは、「昔はムスリムに対する偏見を持っていたが、一緒に働くことで偏見がなくなりました。バランゴンバナナはツピの平和構築にも貢献している」と言います。

化学合成農薬・化学肥料を使わずにバナナを栽培していることは、地元の行政に高く評価され、ツピバランゴン生産者協同組合（TUBAGA）は様々な賞を受賞しています。

レイクセブ

レイクセブ町では、2006年からバランゴンバナナが出荷されています。町の住民の約65%はオボ族、ティボリ族といった先住民民族で、残りの35%が他島からの移民です。バランゴンバナナ生産者の多くも先住民民族です。



定住した生産者の家の周辺でもバランゴンが栽培されている（レイクセブ）。

先住民民族は元々狩猟採集生活を送っていました。ラタン（籐）採集、焼畑農法、炭作り、狩猟などで生活してきましたが、環境の変化のなかでこうした生活を送ることが厳しくなっています。多くの人びとは土地を離れ、仕事を求めて都市に移りました。安定的な販売先があるバランゴンバナナ栽培は、地元で現金収入が得られ、定住化に貢献しています。

一方で、レイクセブ町は標高500〜1000メートルの山間部に位置しているため急な傾斜も多く、雨季のバナナ集荷の困難さや、生産者の栽培技術の向上といった課題もあります。とくに元々狩猟採集生活を送ってきた先住民民族にとって、作物を手入れし栽培していくことは大きなチャレンジであり、レイクセブの出荷責任団体である高地アララ溪谷農事法人（UAVFI）

生産者たちのその後に 驚き！

中村智一／なかむら・ともかず
（朝オルター・トレード・ジャパン 事業部商品三課）

東ティモール・エルメラ県レキシ村のコーヒー生産者コミュニティでは、数年前から養鶏に取り組んでいます。子どもたちの慢性的な栄養失調を改善すべく、



新たに建設された鶏舎。

貴重なタンパク源を与えるため、ATJが生産者と始めたプロジェクトです。この取組に賛同する団体から支援を頂き、コーヒー生産者の中で希望者を募り、各自で養鶏を営んでいました。しかし、病気の蔓延により鶏が死滅したり、予防のためのワクチンが充分確保できなかったり、鶏舎が風雨で倒壊してしまったりと、数々の課題に直面しました。このような状況で、生産者も養鶏への意欲が下がり、昨年訪問した際には、一部の生産者の鶏舎が炊事場にとっていているという事態に…。そして、やむなくこのプロジェクトの打ち切りが決定されました。

今年6月、彼らの村を再び訪問する機会があったのですが、これまでにない大きく立派な鶏舎がありました。リーダーのジョンさんに話を聞いたところ、プロジェクトの打ち切り決定後、どうしても養鶏を続けたいという想いがあり、村のメンバー34人で10ドルずつ出し合い、ATJのコーヒー豆の価格に上乗せされている社会活動費の積立金も活用して、鶏舎を建てたとのこと。また、メンバー内で昼夜交代のシフトを組み、鶏舎に泊まり込みで世話にあたっているのだそう。ジョンさんは、「今後は鶏を増やして、市場にも売れるようにしたい」と意気込んでいました。彼らの熱意と自主的な行動力、負けず嫌いな性格に驚きつつ、彼らの今後の活躍を期待しています。

多国籍企業が、山の水源に近い地域にプランテーションを拡大しようとしたため、それを阻止するためにドンボスコ財団は、ヨーロッパの財団からの助成金で約50ヘクタールの土地を購入し、人びとに分配しました。その後、環境に優しく、生産者の安定的な収入が見込めるバランゴンバナナに期待し栽培を始めました。生産開始後、バンチートップ病や干ばつといった課題に直面し、新たな手入れ方法の研究などを重ね、課題の克服に取り組んでいます。地元の高校からは、有機農業に関する授業も任されるほど信頼されています。

ビクター・コルテスさん

ツピの生産者

私は多国籍企業の契約栽培でパパイアも育てていますが、セミナーに行くと、農業は健康に影響ないと言われます。しかし、化学合成農薬を使用しないバランゴンバナナは生産者にとっても安全ですし、日本の消費者のみなさんにも喜んでもらえるので、今後も引き続きバランゴンバナナを栽培していきます。



ボイエット・マドロンさん

レイクセブの生産者

私はバランゴンバナナを生産者であると同時に、生産者をサポートする現場スタッフでもあります。バナナから得た現金収入で、私たち生産者は生活必需品を購入し、学校に通うための子どもの交通費を賄っています。



今回はフィリピン・ミンダナオ島のバナナプランテーションについてご紹介しましたが、現場の様子がより伝わる映像でも知ることができます。アジア太平洋資料センター（PARC）が制作したDVD『甘い果実の苦い現実』です。ATJとAPLAも協力しました。特集に出てくるチンキー・ベリーニョさんも登場します。機会がありましたら、ぜひご覧ください。（吉澤）

今号のTOPICSは2つともダムにまつわるものですが、いかがでしたか？ コーヒーを通じてのつながりがある私たち、ラオスで起きたダムの決壊事故のことはぜひきちんと知らなくては……とメコン・ウォッチの木口由香さんにご寄稿を依頼したのみならず、石木に暮らしていらっしゃる石丸穂澄さんをご紹介いただきました。感謝感謝です。

ちなみに『はたるの川のまもりびと』をぜひハリーナで紹介したい！と編集会議で提案したのは実は私です。ぜひ自主上映などでこの映画が各地に広がってほしい、APLAでもいつか企画したいな、そんなことを思っています。（野川）

ハリーナ

2018年11月号 vol.02-no.41
2018年11月1日発行

【編集者】
吉澤真満子
野川未央

【表紙写真】
長倉徳生

【デザイン・制作】
十年舎

【編集・発行】
特定非営利活動法人APLA
（APLA／あぷら：Alternative People's Linkage in Asia）
〒169-0072
東京都新宿区大久保2-4-15
サンライズ新宿3F
〈tel.〉03-5273-8160
〈fax.〉03-5273-8667
〈e-mail〉info@apla.jp
〈URL〉https://www.apla.jp

【印刷】
有限会社だいもん印刷

事務局の動き（2018年5月～2018年10月）

5月 1日	川村学園女子大学のゼミ授業で吉澤が話をしました。
5月 3日	日の出マルシェに出店しました。
5月 19日	東ティモールフェスタ2018に実行委員団体として参加しました。
5月 20日	第2回食育プチマルシェに出店し、カカオワークショップを担当しました。
5月 20日	三島フィリピンDAYに出店しました。
5月 21日	立教大学で野川が授業をしました。
5月 25日	新宿文化センター主催コーヒーワークショップで講師を務めました。
5月 28日	二本松有機農業研究会によるソーラーシェアリングの設置作業を現場訪問しました。
6月 2日	APLA総会、10周年記念パーティーを開催しました。
6月 4日～16日	東ティモールへ野川が出張しました。
6月 11日	農業経営大学校で吉澤が授業をしました。
6月 23日	埼玉県富士見こども大学☆ふじみで「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。
7月 7日～17日	東ティモールへ野川が出張しました。
7月 9日～17日	フィリピンへ秋山、吉澤、寺田が出張しました（吉澤は13日まで、寺田は6日～28日まで）。
7月 21日～28日	グリーンコープ青少年ネグロス体験ツアーが開催され、評議員・大橋さんと寺田が同行しました。
7月 23日	アークス仏教国際協力ネットワーク主催「西日本豪雨被災地支援チャリティバザー（第1回目）」に出店しました。
7月 28日、29日	エシカルバナナ・キャンペーン主催『甘い果実の苦い現実』にフィリピン・ミンダナオ島からゲスト2名を招聘し、京都（28日）、東京（29日）で現地からの報告セミナーを開催しました。
8月 3日	佼成女子学園高等学校で吉澤が授業をしました。
8月 13日、14日	東京江東区清澄白河でPtoPカフェを出店しました。
8月 17日	トヨタ財団国際女性プログラムのインタビューを受けました。
8月 18日	パルシステム東京主催ピースフェスタに出展しました。
8月 19日	パルシステム埼玉南越谷地区で「ホンモノの手づくりチョコレート・バナナワークショップ」を開催しました。
8月 22日～9月 5日	フィリピンへ寺田が出張しました。
8月 25日	アークス仏教国際協力ネットワーク主催「西日本豪雨被災地支援チャリティバザー（第2回目）」に出店しました。
8月 31日～9月 5日	グリーンコープ主催 f r o mネグロス組合員ツアーが開催され、ネグロス島を訪問し、評議員・大橋さんと寺田が同行しました。
9月 1日、2日	Love Farmer's Festival2018にPtoPカフェで出店し、「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」の講師を務めました。
9月 2日	グリーンコープふくおか30周年まつりにATJと一緒に参加しました。
9月 10日	第1回APLAゼミを開催しました。
9月 29日	理事会・評議員会を開催しました。
10月 4日	PARC・DVD『甘い果実の苦い現実』の完成上映会に参加しました。
10月 13日、14日	食育マルシェに出店し、「ホンモノの手づくりチョコレートワークショップ」を開催しました。
10月 14日	日の出マルシェにPtoPカフェで出店しました。
10月 15日	パルシステム東京用賀委員会で「ホンモノの手づくりチョコレート・ワークショップ」を開催しました。
10月 18日	目白大学で吉澤が授業をしました。
10月 19日	互恵のためのアジア民衆基金（APF）の総会に出席しました。
10月 21日	「第2回ひでの観光&物産フェア」にPtoPカフェで出店しました。
10月 23日	パルシステム埼玉平和のつどいに参加しました。
10月 26日	「いのり題目の日」にPtoPカフェで出店しました。
10月 26日	パルワゴン・パルキッチンに出店しました。
10月 29日	グリーンコープ主催 f r o mネグロス学習会に参加しました。

事務局からお知らせ

以下の呼びかけに賛同・協力しました。

- 市民社会スペースNGOアクションネットワーク（NANCiS）
- 要請文「ガザでの抗議運動参加者に対する実弾使用中止の働きかけ、真相調査の調整に尽力してください」
- 第10期沖縄意見広告運動

DVD『甘いバナナの苦い現実』、APLAでも販売しています！

APLA SHOP《www.aplashop.jp》にて販売しています。

お電話・FAXでのご注文も承ります。

TEL：03-5273-8160 FAX：03-5273-8667

2018年／78分／日本語／16：9／カラー／片面2層／Regionコード：ALL／定価：6,500円＋税

★『ハリーナ』のバックナンバーがウェブサイトでもご覧いただけます。

最新号発行に合わせて前号を掲載しています。「ハリーナ」を紹介くださる時などにご活用ください。

<http://www.apla.jp/archives/publications>



2016年から動き出していたものの、二本松市内で前例がないという理由で農地転用の許可が下りるのに1年4ヵ月の時間を要し、2018年の5月ようやく架台設置が始まりました。ところが、架台と合わせて入荷予定であったソーラーパネ



完成したソーラーシェアリングのパネル。下には野菜が植えられています。

市内で初めてのソーラーシェアリングを二本松有機農業研究会が始めたことで、地域の中では取り組みが広がっていくようにと次なる動きも芽を出しているようです。（吉澤真満子／APLA事務局長）

From Fukushima 福島 ソーラーシェアリングで 売電が始まりました！

二本松有機農業研究会でソーラーシェアリングの構想が動き出して以降、パネルサポート制度を設け、2016年9月にキックオフ集会を開催するなど、実現に向けて応援をしてきました。現在までにサポーターの皆さんの支援金や募金を合わせて113万6500円が集まり、二本松有機農業研究会に届けています。

ルが届かず、さらに中国のメーカーとのやりとりが一時不通となる等のトラブルが発生する事態に。7月下旬に無事パネルが入荷し、猛暑のなか設置作業が進み、8月24日には東北電力の配線との接続が開始しました。念願の売電が始まり、代表の犬内督（あきむね）さんは「何度か気持ちが折れそうになった時も、サポーターはじめ、周りの熱い思いがあったので乗り越えられることができた」と話しています。

From Northern Luzon, Philippines 北部ルソン 公設市場に BMWプラント が設置されました。

首都マニラがあるルソン島の北部では、低地に穀倉地帯が広がり、高地には冷涼な気候を活かした高原野菜の産地があります。ここで採れた野菜の多くは、首都マニラの食を支える大きな役割を担っており、ヌエバ・ビスカヤ州の青果物卸売市場（NVA）には、マニラから多くの仲買人がやってきます。

APLAのパートナーであるギルバート・クミラさんは、マリン渓谷で柑橘栽培を営む一方、NVAの代表でもあります。自分の農場にBMW技術を導入し、その効果を実感し、また来日した際には様々な現場で実用例を学んだことで、市場の排水処理で活用することや、市場に野菜を卸す生産者たちがBMW技術で製造される生物活性水を活用し、地域に持ち帰ることで、有機農業への転換や農業技術の向上への手助けになったらと思案されていました。

NVAで取引されているものは青果物だけでなく、豚や鶏などの家畜もいます。競りに出す家畜の一時飼育場から出る糞尿と市場から出る残渣で作る堆肥を原料にBMW技術を生かした排水処理の導入が決まり、2018年7月にBMWプラントが完成し、運用がスタートしました。それに伴い、プラントの開所式とBMW技術のセミナーを開催。周辺地域の農民、NVA職員、NVAでインターンをしている学生など50名以上が集まりました。まず、BMW技術協会の伊藤幸蔵理事長からBMW技術の理念と地元の実情、続いて秋山澄兄事務局長からどのように生物活性水がつけられるのかといったBMW技術の基礎的な説明、アジアにも広がる各国の事例の紹介があり、具体的な使い方などに関するセミナーがありました。最後にネグロス島のカネシゲファーム・ルーラルキャンパス（KFRC）のエリマー・トグハップ事務局長からフィリピンでの使用事例



セミナーに参加した皆さんで集合写真。

として、KFRCの取り組みや効果なども混じえた発表がありました。参加者全員が生物活性水に関心を持った様子で、私ならこう使いたいなどのコメントが出てきました。

今後、トラックいっぱい生産物を積み込んでNVAにやって来た生産者の多くが、市場でつくられた生物活性水を空のトラックに積んで持ち帰り、地域で活用されていくことが期待されます。（寺田俊／APLA事務局）

KITCHEN APLA

キッチンあぷら

Featuring **エコシュリンプ**

料理人が教える「ストーリーのある食材をより楽しむレシピ」

個性的な料理人たちに、民衆交易の食材を使って作ってもらったレシピをお届けします。

レシピ提供・料理

鈴木 裕 / すずき・ひろし
エヌ・ハーベスト(※)



海老のココナッツカレー

南インド・ケララ風の本格的なエビカレーがご家庭で簡単に！

エコシュリンプは最後に加え、火を通しすぎないのがプリプリに仕上げるコツです。

写真：平河 夏 (PHOTO LIEN ∞)

材 料 (3～4人分)

エコシュリンプ(Mサイズ) … 10尾
油 … 大さじ2 玉ねぎ … 100g (1/2玉)
にんにく、生姜 … 各小さじ1
青唐辛子(ししとうでも代用可) … 2本
トマト缶 … 1/2カップ 塩 … 小さじ1.5
水 … 200cc ココナッツミルク … 200cc
レモン果汁 … 大さじ1
コリアンダーリーフ … お好みで ごはん … 適量

【ホールスパイス】

クミンシード … 小さじ1/2
ブラックマスタードシード … 小さじ1/2

【パウダースパイス】

ターメリック … 小さじ1/4
レッドチリ … 小さじ1/3
コリアンダー … 小さじ1

作り方

【下準備】エコシュリンプは解凍し、殻を剥いて背側に軽く切り込みを入れておく。玉ねぎは薄くスライスしておく。にんにく、生姜、青唐辛子はみじん切りにしておく。ごはんを炊いておく。

【1】フライパンに油を熱してホールスパイスを揚げるように炒める。マスタードシードが弾けてきたら玉ねぎを入れて軽く色づくまで中火で3分ほど炒める。

【2】にんにく、生姜、青唐辛子を加えて、香りが立つまで約1分炒める。

【3】トマトを加えて、つぶしながら中火で1分ほど炒める。

【4】弱火にして、パウダースパイスと塩を入れて軽く炒める。

【5】水を加えて1回よく混ぜ、沸騰したら中火で1分。さらにココナッツミルクを入れて、再度沸騰したらエコシュリンプを入れ、1分ほど煮てから、レモン果汁を加えてひと混ぜする。

【6】器にカレーを盛り、お好みでコリアンダーリーフをのせる。ごはんは別のお皿に盛って、食卓へ。



エコシュリンプはオンラインショップ APLA SHOPにてご購入いただけます。

<http://www.wplashop.jp/>

(※)エヌ・ハーベスト 環境に配慮して作られた食品や雑貨などの普及と、エコロジーに対する新たな視点の提案を目的とし、オーガニック&フェアトレードのスパイス、ドライフルーツ、紅茶などを輸入・販売。

直営店：東京都杉並区松庵3-31-17 <http://www.nharvestorganic.com/>

ハリーナ HALINA

2018年11月号 vol.02-no.41 2018年11月1日発行 頒価 300円(税込)

【編集・発行】

特定非営利活動法人 APLA (APLA/あぷら: Alternative People's Linkage in Asia)

〒169-0072 東京都新宿区大久保2-4-15 サンライズ新宿3F

〈tel.〉03-5273-8160 〈fax.〉03-5273-8667 〈e-mail〉info@apla.jp

〈URL〉<https://www.apla.jp>

APLAの活動を応援してください。

月々500円からサポーターになって APLAとつながる!

APLAでは、会員(年会費5,000円)の他、新たにサポーター制度を導入し、「マンスリーサポーター」と「APLAサポーター」を募集しています。詳しくはwebsiteをご覧ください。リーフレットが必要な方には郵送いたします。

問い合わせ・お申し込み

APLA事務局にご連絡いただくか、下記のwebsiteからお申し込みください。QRコードからもアクセスできます。

<https://apla.secure.force.com/>

